

変更点についてのご案内

今年度は例年と変更点が数点あります。プログラムに先立ちご案内申し上げますので、ご注意ください。

*受付開始時間

13:00 より（例年より 20 分遅い受付開始です）

*大会開始時間

13:15 より（例年より 15 分遅い受付開始です）。なお、特別講演後の休憩は 10 分間となります。

*会場

帝京大学霞ヶ関キャンパス教室 1（下の案内をご参照ください）なお、当日は休日につきドアにはロックがかかっておりますが、中に開閉のための要員が待機しています。お声をお掛けください。

*会場費

今年度よりいただかないことになりました。今まで多大なご協力をありがとうございました。

*会費のお支払い

今年度より会場でのお支払いをご遠慮いただくことになりました。お振り込みにご協力ください。
振込先：ゆうちょ銀行 口座記号・番号 00190-0-661999 日本シェリー研究センター
会報に振込用紙を同封してありますので、ご利用下さい。

*懇親会

民間のレストランで開催しますので、キャンセルの場合は必ず期日内に大会運営係（新名）か、他の幹事に御連絡ください。なお、当日キャンセルは店側に多大な迷惑となりますので、期日を過ぎた場合も必ず御連絡をお願い致します。キャンセル〆切：11月30日

帝京大学 霞ヶ関キャンパス ご案内

〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-16-1 平河町森タワー9階

- 東京メトロ有楽町線・半蔵門線・南北線「永田町駅」より徒歩約1分（4番出口）
- 東京メトロ銀座線・丸ノ内線「赤坂見附駅」より徒歩約6分（7番出口）



（帝京大学 ホームページより引用）

日本シェリー研究センター第28回大会

日時： 令和元年（2019年）12月7日（土）13:00 受付（例年より20分遅い開始です。ご注意ください）

場所： 帝京大学 霞ヶ関キャンパス 教室 1

（例年とは違う会場です。アクセスについては最初のページをご参照ください）

プログラム

1. 13:15 **開会の辞** 会長 阿部 美春

2. 13:20 **特別講演** 長島 一比古

ウィリアム・ブレイクのゴシック的詩風

——『フランス革命』における〈ゴシック〉と〈恐怖〉——

3. 14:30 **日本シェリー研究センター シンポジウム**

シェリーの〈驚異の年〉再考

——メアリとともに織りなす生 (lives) と言の葉 (leaves) ——

司会 木谷 巖

パネリスト I 岡 隼人

メアリーとパーシーの1819年——『マチルダ』と『チェンチ一族』を中心に——

パネリスト II 池田 景子

パーシーとメアリのシビルの葉——「西風に寄せるオード」と『最後の人間』——

レスポンス 木谷 巖

4. 16:40 **年次総会** 昨年度分会計報告・役員改選・その他

* 17:15 **懇親会**

会場ビル内の「ラテンビストロバー・マドゥレス」にて開催致します。（会費5,000円）

是非ご参加ください。なお、申し込み後キャンセルをされる方は11月30日までにお知らせください。

当日キャンセルは店側に多大な迷惑となるため、期日を過ぎた場合も必ずお知らせください。

事務局からのご連絡

*今年度から会場費はいただかないことになりました。今まで多大なご協力をありがとうございました。

*今年度から会場にての会費の支払いはご遠慮いただくことになりました。郵便局の振り込みをご利用ください。

第28回大会プログラム

特別講演

ウィリアム・ブレイクのゴシック的詩風

——『フランス革命』における〈ゴシック〉と〈恐怖〉——

長島 一比古

ブレイクは独自の壮大な神話体系を創造した神秘思想の詩人と呼ばれ、その思想が克明に研究されて来ているが、そもそも彼はバザイアの徒弟時代から本質的に現実世界に根を下ろした職人であった。そして、現実世界を直視し社会的政治的事象に敏感に反応して、詩を書き挿絵を描き彫版し世に送り出そうとした。しかし、彫版師として請負仕事をして生計を立てていくことは決して楽なものではなく、それはただ彼ひとりの問題ではなく、彼のような職人など庶民に共通の問題であった。

18世紀から19世紀のイギリスでは、様々な労働者や教派による動乱が相次ぎ、アメリカ独立戦争やフランス革命などの影響もあって不安定な社会情勢が続いていた。1780年には〈ゴードン暴動〉が起こった。ブレイク伝は、当時22歳のブレイクがデモ隊の一群に遭遇して暴動を目撃したと記録し、その偶然性と不本意性を強調しているが、証拠立てられていない。もしやという疑念が湧いてくる。そして、これらの革命に期待を抱いていたブレイクが『フランス革命』などの政治詩を執筆したのである。また一方で、このような動乱や侵略に対する〈恐怖〉や〈不安〉が、理性主義の時代に、ゴシック小説を流行らせた社会的要因のひとつであったとされている。従って、このような革命や動乱とゴシックの関連性をブレイクの詩作との関係において考察するのは興味深い。

ブレイクのゴシックは、彼の経歴故に挿絵に描かれたゴシック建築の解釈が議論の中心になり、彼の芸術的象徴や芸術的原理として論じられるが、詩作品そのものにおける役割について具体的に考察されることは少ないようである。まずここで、「美しきエリナー」は、若きブレイクのゴシック研究の習作であり、その成果である〈恐怖〉を基調とした〈ゴシック情調〉は、以後の作品に継承されて行くということを認めたい。この〈ゴシック情調〉は、『フランス革命』に受け継がれ、これを境にブレイクの情調は意図的にゴシック的趣へと変化して行く。彼はゴシック的表現や道具立てを詩語として用いたのだが、その理由は、それらが詩語たり得るからであり、当時流布していたゴシック小説によって民衆に浸透していた〈恐怖〉の内的経験を、『フランス革命』からも引き出そうと目論んだからであったと推察できる。

そこで、『フランス革命』を執筆した背景について激動期の政治的社会的様相について諸研究を参考にしながら概観し、『フランス革命』にゴシックをどのように取り込んでいるのか、具体的にテキストの用語法をゴシック小説の代表作品における用語法と比較しながら考察する。そして、〈恐怖〉を基調とした〈ゴシック情調〉がブレイクの詩作品から醸し出される独特の趣の基調となっていることを、それを確立させた作品として『フランス革命』を読み解きながら鑑賞したい。

(ながしま・かずひこ：川村学園女子大学名誉教授)

シンポジウム

シェリーの〈驚異の年〉再考

——メアリとともに織りなす生 (lives) と言の葉 (leaves) ——

司会 木谷 巖

妻メアリとともにイタリアでの新たな生 (*vita nova*) を歩み始めた1818年、パーシー・ビッシュ・シェリーの詩的靈感はますます高まり、翌年『鎖を解かれたプロメテウス』や「西風に寄せるオード」はじめ、今でも親しまれる代表的な詩群が発表されることになった。この1819年は、スチュアート・カランによる同名の著作が示すとおり、シェリー研究において〈驚異の年 (*annus mirabilis*)〉とも呼ばれている。その200周年を記念し、今回のシンポジウムは、1819年におけるパーシー・シェリーと生の問題についてメアリとの関係に焦点を当てる。なぜならば、この時期の詩にみられる生をめぐる(むろん、そこには社会や政治も含まれる)さまざまな詩想こそ、最後の大作『生の勝利』(1822)における「では、生とは何か (*Then, what is life*)」(l. 544) という問いにまで連綿とつづく、シェリーの詩学における重要な主題であるからだ。同時に、パーシーの詩作においても、また死後出版の編纂においてもメアリの存在なしに〈驚異の年〉は成立しえない。そして、それらをどのように説明することが可能か——こうした問いについて3名のパネリストが議論する。はじめに岡隼人が1819年前後におけるメアリとパーシーが互いの作品にもたらした影響関係を中心に論じ、つづいて池田景子が「西風に寄せるオード」における詩人の案内人としてのメアリについて論じる。両者の司会およびレスポンスは木谷巖が務める。

(きたに・いつき：帝京大学)

メアリーとパーシーの1819年——『マチルダ』と『チェンチー族』を中心に

パネリストⅠ 岡 隼人

『フランケンシュタイン』を1818年に出版したメアリー・シェリーは翌年には早くも『マチルダ』という中編小説を手掛けた。ただこの作品は父と娘の近親姦というテーマを扱っていたため、またその他の理由から、父ウィリアム・ゴドウィンの手によって「お蔵入り」とされてしまう。1819年、同じ近親姦をテーマとした詩劇をパーシー・シェリーは執筆している。本シンポジウムは1819年がテーマとなっている。そこでこの年に同じテーマについて著された『マチルダ』と『チェンチー族』に焦点を当てて、メアリーとパーシー2人の1819年とそこまでの道のり、そして両者の影響を見ていければと思う。また、池田先生の扱われる1819年の詩「西風に寄せるオード」に現れる“[thorns of] life”という言葉とメアリの『最後の人間』の中で引用符を付けて言及する“life”の繋がりを見つけられれば面白いのではないかと考えている。

(おか・はやと：大阪歯科大学)

パーシーとメアリのシビルの葉——「西風に寄せるオード」と『最後の人間』

パネリストⅡ 池田 景子

「西風に寄せるオード」において、詩人の言葉は西風の精神を取り込み世界を啓発する預言、シビルの葉である。ここで詩人はシビルの葉に託して火花と灰をばら撒く。火花と灰のイメージは『詩の弁護』においても見られ、愛によって世界を啓発したダンテ像と一致する。一方で、パーシーはダンテ作品の不朽性を評価する際、読者がダンテから啓発を受けるには「案内人 (*conductor*)」が必要だと主張する。そうすると、読者が「オード」におけるシビルの葉から火花を見出すには、やはり「案内人」が必要ではないか。パーシーにとって案内人のひとりだったのは、作品の注釈をつけて死後出版をしたメアリである。メアリは、『最後の人間』でパーシーやバイロンをモデルにした登場人物を描き、西風とばら撒かれた葉のイメージを踏襲している。パーシーによって「ばら撒かれた」言の葉はメアリによって回収されて意味づけがなされ、火花として再生していることを立証していきたい。

(いけだ・けいこ：九州国際大学)